魔導校の革命　～交差する想い～

tsukasa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔導校の革命　～交差する想い～

【Ｎコード】
Ｎ０７６１Ｚ

【作者名】
ｔｓｕｋａｓａ

【あらすじ】
現代社会に欠かせなくなった魔法。世界の人口の約７割は魔法の力を持っている人がいる。今や高校にまで魔法指導制度が取り入れられるようになってきた現在・・・・・２０６５年、全国に６つ配置された魔法指導学校に入学した二人の兄妹が送る学園生活

ｃｈａｒａｃｔｅｒ（前書き）

初めまして。ｔｓｕｋａｓａと申します　初めて書く小説、一部ほかの作品と被ったりしてしまう事もあるかと思います（むしろ大きく被る可能性がありますが）
皆さんに楽しく読んで頂ければこちらもうれしいです

character

神無月瀬南・・・・春に国家機関付属魔法指導学校関東支部に入学した一年生。筆記テスト、実技テスト共にトップだったが生まれながらの障害の影響で、順位が大幅に繰り下げられてしまった使用魔術（メインマジック）は波動魔法。しかし希少人数を誇る魔法喪失師（ロストマジシャン）階級（ランク）は最低のEランク　刹那の兄

神無月刹那・・・・瀬南と同じく国家機関付属魔法指導学校関東支部に入学した一年生。兄の代わりに主席入学した超エリート。使用魔術（メインマジック）は風属性の空圧　物質内の圧力を変えることによって様々な能力を発揮する。階級（ランク）はS　瀬南を「お兄様」と呼んでいる。

神無月聖弥・・・・元数字保持者（ナンバーズ）、旧姓九頭最。瀬南に人体的な被害を与えた事によって、数字を取り上げられた。

南方凛・・・・国家機関付属魔法指導学校関東支部に入学した一年生。瀬南と同じクラスで仲良くなった女子。使用魔術（メインマジック）は物理性の剣技

道生慎哉・・・・国家機関付属魔法指導学校関東支部（（以下関東校）に入学した一年生で瀬南と同じクラス使用魔術（メインマジック）は物理性の浮遊

三河麗亜・・・・関東校の生徒会長。三年生。数字保持者（ナンバーズ）3、三河の一人娘。校内における配偶を目下している。使用魔術（メインマジック）は風属性の疾風。主要武器の銃を使い、弾速を最大限まで出す。

川上卓・・・・麗亜の側近。二年生、使用魔術（メインマジック）は、物理性の物質移動。

村居栄季・・・・校則違反者捕獲委員会、通称ハンターの委員長。瀬南の魔法ランクがEという事にも関わらず、ハンターに入れようとする。使用魔術（メインマジック）は分解。

〜〜以下現時点での登場人物〜〜

word library（前書き）

小説名変更いたしました

word library

魔法師・・・・俗に言う魔法を一般使用するもの。世界全人口の約四分の三以上が魔法師。

国家機関付属魔法指導学校・・・・略して魔導校。全国に６つ設置されている。関東校、東北校、中部校、近畿校、四国中国校、九州校。各校定員は２８０名であり、８クラス編成。各クラスの人数は平均して３５人。だが、ＳランカーとＳＳランカーはＡ組に属すため人数は均等とは限らない。

五魔法（フィフスマジック）・・・・火、水、風、雷、氷の五つの魔法。この魔法を使用する物は一般魔法より使用する魔法師が少ない。五つも魔法にもそれぞれレベルがあり火と水がレベル１。風と雷が、レベル２。氷がレベル３である

一般魔法（アベレートマジック）・・・・波動、分解、跳躍、剣技、浮遊、射標、物質移動、術子変換、遠隔の９種類ある、これが一般に使われる魔法であり魔導校の生徒は主にこの９種類使われている。
一つの魔法にレベルがあり最大レベルが３
※このほかにも魔法はある

魔力・・・・魔法師が魔法を発動するにあたって必要な力。力のあり方には個人差がある。

術子（エレメント）・・・・現代社会に魔法が存在する今、術子の存在は原子以上となり、数は無限に近い。魔法師は魔法を使い術子を物質化したりする。

ＥＣＳ（ＥｌｅｍｅｎｔＣｏｎｖｅｒｔＳｙｓｔｅｍ）・・・・日本語訳、術子変換駆動機。一人一台は必要な物。術子を転送し使用者あるがままに使われる。

ハンター・・・・正式名称、校則違反者捕獲委員会。校則違反者を取り締まる委員会。
ＥＣＳの無断使用など校則に反するものを捕獲する仕事。普通、ＥＣＳは一般生徒には使用許可されていないが、ハンターは特権を得る。

数字保持者（ナンバーズ）・・・・有能な魔法一族に値するもの。全部で２７家、５年に一度同じ数字の中から更に有能な家系、レベルナンバーズと呼称される。しかし九頭最家は過去に起こした事件がきっかけで数字不時者（ウンナンバーズ）となってしまった。

魔法喪失師（ロストマジシャン）・・・・略して魔失師。魔法による人体事故などで魔法を使うと
一度に大量の魔力が消耗される人のこと。このため魔法師になる事を諦める人もいる。
神無月瀬南もその一人。人数は希少数

階級（ランク）・・・・魔法師が繰り出す魔法の強さ、また規模の事。Ｅ～ＳＳまで７階級ある
魔導校では階級（ランク）の上げはあるが下げはない

一軍（レギュラー）、二軍（イレギュラー）・・・・クラスを更に縮小し生徒一人ひとり実習しやすくなる制度。魔法によって決まり昇格降格制度がある。
～現時点での用語～

第一話、入学式当日の朝（前書き）

ｔｓｕｋａｓａです。一部の作品と被る（大いに被る可能性）があります
が
読んで行って下さい

第一話、入学式当日の朝

西暦２０６０年、現代社会では魔法が一般的に普及され使用することが多くなった。
目的地までの移動手段、重たい荷物を運ぶ時の運搬手段・・・・・・・まだまだたくさんある。
今じゃ一般に使われる事になった魔法も学校で教わる制度が導入された。
その学校ー国家機関付属魔法指導学校。通称、魔導校。
一流の魔法師になるために、毎年多くの人数がこの魔導校に受験する人がいる。
試験とはいってもペーパーテストだけではない。
実技試験だって当然のことある。
そんな多くの生徒が受験する魔導校は生徒が多くて狭いんじゃないかって思う人もそう少なくはない。
魔導校は全国に６か所設置されている。
東京の関東校、宮城の東北校、名古屋の中部校、大阪の近畿校、広島の中国四国校、福岡の九州校
各校、定員は２８０名、毎年その倍以上もの受験生がいる。
合格した生徒には合否結果と同時に一つの腕章が配られる。
その腕章は魔法発動に担う規模、速さ、判断力などあらゆる分野での成績を基にして定められたもの、
階級（ランク）。
階級（ランク）はＥ～ＳＳまで７段階あり、クラス編成もこの階級（ランク）を基にして決められる。
いまや階級（ランク）も社会的面でも使用されることになった。
会社での採用試験などでもこの階級（ランク）は使われている。
学校などでは、授業で使う物が一部階級（ランク）によって限られるが、先生が生徒などの対応は今も昔も変わらず階級（ランク）を問わない。

この階級（ランク）づけ、たとえ兄妹だとしても変わりはない。

魔法が十分使えない兄でも、階級（ランク）は変わらない。

――――――――――――――――――――――――――――――――――

四月と言うのは基本、出会いの季節だと言われる。

21世紀半ばに差し掛かった今でもこの考えは続いている。

東京都内にそびえたつビルとビルの間に一軒家がある。

その家の表札には、「神無月」と記されている。

家の大きさは普通の一軒家と比べてややでかく、かなりの大家族か？と思う人がいるかもしれない。

しかしこの一軒家に住んでいるのは年頃の男女二人だけ。

ちゃんと血の繋がった兄妹である。

今は朝、その兄弟はまだ食事中であったが、兄の方は既に食べ終えていて、何かの書類に目通していた。

妹は真新し制服をどこひとつ汚すことなく口に運んでいる。

「まだ時間はあるな」

携帯端末で時間を確認した兄は、席を立ち食器を片づけカップに残っていたコーヒーを飲み始めた。

「お兄様、試験結果を見て何か不満でもありませんでしたか？」

声を掛けたのは妹の刹那。喋り方にも内容にも棘がある言葉はさすがに兄である瀬南も反論できず肩をすくめるしかなかった。

「あのな、判定結果が出たりしたものはもうそこで決まりだぞ？」

「そんなことは百も承知の上です。ですがあれだけの点数で階級（ランク）がEというのは試験管の目が腐っているとしか思えません！！」

なぜこんなに試験判定に文句をつけているのかと言うと、書類から見て分かる通り瀬南の試験結果は、筆記テスト500点満点中、489。実技テスト250点満点中、236。と言う文句なしの結果になっている。

当然なら、冒頭にもあったようにこの結果だと間違いなく階級（ランク）はＳ
以上と言うようになるが
見ての通り瀬南の階級（ランク）はＥであった。
「確かにお前もこの判定で起こるのは無理もないだろう」
「ですがＥランクと言うのは幾ら何でもひどすぎます！！」
「刹那落着け。」
興奮している刹那を落ち着かせる瀬南。刹那は瀬南の言葉に従った。
「そういや、今年の新入生代表挨拶は刹那だったよな？」
「はい、お兄様が一位ではなかったため私が繰り上げで一位になり
ました」
そういい、食器を片づけ洗い物をし始めた。
瀬南は妹の仕事が終わるまでゆっくりコーヒーを飲んでいた。
１０分後
洗い物をし終え、着替えを既に済ませた刹那は瀬南に声を掛けた。
「お兄様そろそろ時間ですよ」
「わかった」
刹那にせかされ急いで玄関に行こうとする瀬南。
「おっと、忘れ物」
机の上に忘れ物を取りに行き玄関に行き靴を履き妹と共に家を出た。
Ｅと記された腕章をはめて。
―――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――
――――――――
現在の交通網は昔と変わらない。
自動車はもちろん、自転車、バイク、電車など変わったものの一つな
い。
瀬南と刹那は入学式の今日は電車を使って登校している。
二人隣り合わせに座り、駅に着くまで落ち着いた雰囲気を過ごす。
「お兄様。」
不意に刹那が話しかけてきた。こうした公共の施設にいる場合あま

り話すことはないが刹那が話しかけて来るとは余程の事だろう。
「なんだ？」
「お兄様は自信がE階級者（ランカー）ということに何か劣等感という物は無いんですか？」
刹那らしいと言えば刹那らしい質問だが瀬南はしっかりと具体的に応答した。
「刹那、お前まだそんなことを根に持っているのか？E階級者（ランカー）は俺だけじゃない。
俺は俺。刹那は刹那だ。」
周囲にあまり目立つような大きな声を出さずに言った。
「すいません。言葉が過ぎてしまいました」
「わかればいいよ」
顔を俯きながら謝る刹那に瀬南は優しく髪を撫でた。
列車が止まり、駅に着いたようだ。瀬南たちは駅を出て魔導校、関東校へと向かった。
やはり関東校前の駅だからなのか列車の中にもちょくちょく同じ制服の人がいたがまさかこんなにいるとは瀬南は想像していなかっただろう。
すると瀬南は周囲からの視線に気づいた。
「・・・・・・妙だな」
「お兄様？」
歩くのをやめ周りを見ると、関東校の人が刹那と瀬南に視線を向けていた。どうやら二人を恋人と勘違いしている人がいるのだろうか。
入学式早々から厄介ごとになりそうだ。と瀬南はしみじみ思った。

第二話、入学式（前書き）

どうも、ｔｓｕｋａｓａです。
他の作品と被らないようにします

第二話、入学式

入学式の生徒受付は昔と変わらず校門付近で行っている。
しかし変わったのは一つ。
生徒は合否判定書と同様に送られてきたプログラムを専用端末にインストールし入学式に臨む。と言うのが今のコンセプト。
刹那は挨拶があるため途中で瀬南と別れなくてはならない。
別れ際、「私の勇姿を見てください」と念を押されたが無論、瀬南はそんなことを言われずとも刹那がこういう大舞台で活躍する機会は全て記憶に残している。
本人がそれを知っているかどうかは別として。
そんな妹が本番前にリハーサルをしている間適当にぶらついていようかという考えは本人もわかっていたが、他にする事が無いのは確か。
だからと言ってE階級（ランカー）者がそこら辺をほっつき歩いているかどうかと周りはそう思うだろう。しかも新入生が。
教室に足を踏み入れるのも彼として気が進まなかった。
挙句の果て瀬南は、どこか座れる場所はないか探しに行った。
受付場所から離れた中庭へ行きベンチに腰を下ろした。
端末を開き、入学式の予定を確認する。式開始まで１５分ほど時間はあった。中途半端に時間を過ごすことになるので早めに会場である第一体育館に移動した。
――
中に入るとかなりの人数・・・がいるのは確か、新入生は２８０名これだけの人数がいてもおかしくはない。
瀬南は自分のクラスであるE組の席、最後列の席へと向かった。
ちなみにクラス編成の基準は、階級（ランク）で定められている。ＳＳ、Ｓ、Ａ、はＡ組。ＢはＢ組。ＣはＣ組。ＤはＤ組。ＥはＥ組。という感

じで構成されている。
話をもどそう。
瀬南は適当に空いている席へと座った。しかし座った場所は場所で狭かった。
体育館はそれほど狭くはない、むしろ大きい方だ。
なのにこんなに一つ一つ席の感覚が小さいのか瀬南にもわからない。
だから隣の人と肘がぶつかってしまうというケースはよくある事
「あ、すいません」
言ってるそばから。相手は女子だった。
「悪い」
素っ気ない返事で終わり両者式が始まるのを待つ。しかし先程の女子が話しかけてきた。
「ねぇ、君なんて言う名前？」
馴れ馴れしく聞く彼女。時代劇なら、「人に名を尋ねるときはお主から名乗れ」と言うだろうが瀬南はそんなことは気にしない。
「神無月瀬南。名前でも苗字でも好きなように呼んでくれ」
「私は南方凛。使用魔術（メインマジック）は剣技。瀬南君は？」
いきなりの名前で呼ぶ凛。だが名前でも苗字でも好きなように呼べと言ったのは彼からである為そんなことは気にしない。
「使用魔術（メインマジック）は波動」
端的に答える瀬南。すると入学式開始のアナウンスが流れた。
指示に従い静かにする二人。
瀬南は式の最中、祝辞やら長々しい言葉は記憶に入れず耳だけで聞き、刹那の挨拶は記憶に残すようにちゃんと聞いた。
しかし刹那のあいさつに見とれる男子生徒、さらに同じ苗字なのか、はたまた綺麗さに見とれた凛の表情に瀬南はやれやれとため息をつくしかなかった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー
入学式が終わり瀬南は自分の教室へと向かった。入学式の日は大抵

授業がないが明日の予定などを端末に入れておかなくてはならないためである。
現代の高校には担任制度があると言えばあるが、授業に顔を見せたりしない。
殆ど生徒たちだけの実習である。
自分の席に着き、端末を机の側面にセットしデータを送り込んだ。
すると目の前に不思議そうに見ている男子生徒がいた。
「どうかしかたか？」
一応聞いてみる瀬南。すると我に返ったように男子生徒はぴくっと動いた。
「ああ、わりぃ。迷惑だったか？」
「いや、別に迷惑だと思っていない」
「そうか・・・・・おっと、俺の名前は道生慎哉。魔法は浮遊を得意としてるぜ」
気軽に挨拶をしてくる慎哉。瀬南はこういう気軽に話しかけて来る人は嫌いではない。
「神無月瀬南。使用魔術（メインマジック）は波動だ」
神無月、と言う言葉に慎哉の眉毛がぴくっと動いた。やはりたいていの人は瀬南が自己紹介する時フルネームで言うと『神無月』と言う苗字に何か引っ掛かるのだろうという事は瀬南はもちろん妹の刹那も経験済みである。
「神無月って・・・・・やっぱ、今日新入生代表挨拶した神無月刹那と関係あるのか？」
「まぁ、兄妹っていうところだな普通に言えば」
「へぇ～～～～～、大変なんだな」
心配してくれてるのか、それとも彼は天然なのか瀬南は知る余地もなかった。
だが、瀬南はいつもとは違う違和感を抱いた。それは初対面の人に自己紹介をすると殆どの人は「あの神無月刹那の兄？」と目を丸くする人が多かった。が、

慎哉は違かった。彼は「あの神無月刹那の兄？」という事は一切言っていなかった。
まあ人誰もが同じこと言うとは限らないというのは瀬南も知っている
「これからもよろしくな」
差し出した右手に瀬南はがっちりと握手をした。

第三話、夕食

「遅くなりました」
「大丈夫。一時間といった長い時間待ってないから」
「そうですか」
時は放課後、瀬南は刹那と一緒に帰るため中庭で待っていた。瀬南の軽い冗談に微笑みを浮かべた刹那は毎日兄の瀬南と一緒に家に帰るのが一日の何よりの楽しみだった。
会話を聞いているとまるでカップルじゃないかと疑う気持ちがあるが、人は見た目で判断してはいけない。
それでも妹と一緒に帰る高校生の兄などそうはいないがこれが二人の習慣である。
「今日挨拶よかったな」
「いえ、自分は書いてある事はただ読んだだけで、お兄様に褒められるような挨拶は・・・・」
「いや、そんな謙遜されても」
苦笑を浮かび上がらせる瀬南。二人は中庭を出ようとすると横から一人の少女が現れた。
まぎれもなく瀬南が入学式に出会った少女ー南方凛であった。
「あ、神無月君」
苗字で呼ばれると二人とも反応してしまうが、刹那はあったことがないため瀬南だけが反応した。
しかし瀬南も名前を思い出すのに０．０５秒の時間が必要だった。
「えーっと、確か南方凛さん・・・・だよね？」
「ええ、で、そちらが妹の刹那さん？」
凛は刹那に目を向けた。刹那は大抵瀬南に絡んでくる女には冷たい目を向けるが（瀬南がモテる訳じゃない）今回はいつもと同じ目だった事に瀬南はほっと胸をなでおろした。
「はい、神無月刹那とお申します」

深々とお辞儀をする刹那。その作法は凛には真似できないほどだった。

「瀬南に刹那か・・・・・・ねえ、私の事は凛って呼んでいいわよ」

「分かったわ。そちらも私の事は刹那でいいわ」

瀬南の呼び方に対しては何も言わなかった刹那。危ないオーラを放ってると瀬南は微妙に感じた。

長年の勘か・・・・そう自分を疑いたかった。

「じゃあ、私はこれで。じゃあね」

手を振り一足先に中庭を出た凛。

「俺達も帰るか」

「はい」

二人は肩を並べて家路へと辿って行った。

―――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――
――――――――

家に着きそれぞれの部屋で部屋着へと着替えた。

一足早く下に降りてソファーに座り、刹那が下りてくるのを待った。

その間、端末のホールドを解除しダウンロードした書籍を読みふけた。

数分後、刹那が部屋に入り瀬南は端末を閉じた。

「お兄様、そろそろ夕食の用意をしてもよろしいですか？」

「もうそんな時間か。そうだな、頼むぞ」

兄からの確認をとり台所に足を踏み入れる刹那。現在の社会では食器を自動的に機械や魔法、料理を自動的に作る機械など普及されているがそれは全員とは限らない。

自らの手で料理を作ったり、皿を洗ったりする人もいる。

刹那は後者である。

瀬南の希望で刹那自らが手がけた料理を食べるのは瀬南の何よりの楽しみでもありまい刹那の癒しの一つである。

言うまでもないがこれはずっと続けていることである。
瀬南は毎日刹那の作った料理に必ず付ける言葉がある。それは・・・・・・
「文句なし」
たかがこれだけかと思うが刹那にとって喜びの一種であった。高級レストとたんにでも出せば好評の嵐が来るのは間違いではない。
そんなことを言いつつも刹那は満面の笑みで瀬南が食べたお皿を洗い始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0761z/

魔導校の革命　～交差する想い～

2011年12月14日21時49分発行